



琉球大学学術リポジトリ

University of the Ryukyus Repository

Title	高機能広汎性発達障害児の社会性障害とファンタジー世界への傾倒
Author(s)	神園, 幸郎
Citation	
Issue Date	2010-12-01
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/18627
Rights	

平成 22 年 12 月 1 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2009

課題番号：18530521

研究課題名（和文）高機能広汎性発達障害児の社会性障害とファンタジー世界への傾倒

研究課題名（英文）Absorption in fantasy observed in children with high functioning pervasive developmental disorders

研究代表者

神園 幸郎（KAMIZONO SACHIRO）

琉球大学・教育学部・教授

研究者番号：70149334

研究成果の概要（和文）：高機能広汎性発達障害児に見られるファンタジーの没入現象について、その特性を明らかにした。第一に、高機能広汎性発達障害児のファンタジーは、対象児に固有なこだわり行動に起源を持つことが明らかになった。第二に、彼らのファンタジーは実体験の再現もしくはそれを基に再構成されたものであり、想像上の存在や架空の物語展開といった虚構性は極めて薄く、その点で定型発達児のファンタジーとは大きく異なることがわかった。

研究成果の概要（英文）：This study examined absorption in fantasy observed in children with high functioning pervasive developmental disorders (HFPDD). First, it was found that fantasy of HFPDD was routine or repetitive behavior in origin. Second, their fantasy was almost re-creation or reproduction of experiences and therefore did not accompany the imaginative entities and/or the impossible story development. These characteristics of their fantasy were different from those of typically developing children.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,300,000	0	1,300,000
2007年度	600,000	180,000	780,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
総計	3,500,000	660,000	4,160,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：高機能広汎性発達障害児 ファンタジー こだわり行動 相貌的知覚 想像力

1. 研究開始当初の背景

高機能広汎性発達障害児の対人社会性を阻害する要因として、彼らに特有なファンタジーへの没入現象が指摘されている。こうしたファンタジーは対人的な場面における不

安や恐怖に対する彼らの自閉的防衛を成し遂げるために利用されているとみられている。しかし、筆者の臨床経験によれば、対人的な不安や恐怖を喚起しがちな、いわゆる見知らぬ他者との接触場面においてはファン

タジーへの没入は見られず、見知らぬ他者との愛着関係が構築され、見知らぬ他者が特定の他者となり、愛着対象として認識されるようになった段階で、ファンタジーへの没入現象が出現することがあった。これらの臨床的な認識から、彼らのファンタジーは対人場面の不安や恐怖に対する防衛機制として出現するとの従来の見解に加えて、愛着関係を基盤とする対人関係の在り様によっても規定される可能性が想定できる。そうだとすれば、対人関係を調整することで、ファンタジー世界への傾倒を防ぎ、同時に他者認識の水準を向上させる効果も期待できるのではないかと考えた。

2. 研究の目的

本研究は高機能広汎性発達障害児の社会性の発達を阻む要因としてのファンタジーへの没入に着目し、以下の点を目的とする。

(1) ファンタジー世界への傾倒は、特定の他者が愛着対象となる局面を契機として出現するとの事実に基づき、ファンタジー世界への傾倒を防ぐために、複数の特定の他者との関係を一定の時間的ズレをもって、多重的に形成することが効果を持ちうるかどうかを検証することを第1の目的とする。

(2) (1)の結果に基づいて、小集団における対人関係の形成、さらには学級、集団における対人社会性の形成に関わる指導プログラムを構築し、その効果の検証を行う。

(3) (1)と(2)の研究結果を基盤として、高機能広汎性発達障害児の社会性障害に対する特別支援教育の基本的な指針を提言する。

3. 研究の方法

(1) 複数の他者との関係の多重形成によるファンタジーへの没入の抑止効果について

①関係性の多重形成に関する時間的ズレの見積もり：既に資料が蓄積されている幼児の3事例について、ファンタジーへの没入現象が出現するまでの特定の他者との愛着関係の形成過程を詳細に分析し、複数の特定の他者との関係を多重化して形成するための時間的なズレを決定する。

②複数の特定の他者との関係性の多重形成：①によって見出された時間的なズレをもって複数の特定の他者との関係性を形成する。関係性の形成が2重化を最低基準の条件として、3重化条件、そして可能であればそれ以上の条件を設けることとする。

③自閉的ファンタジーの防止効果の吟味：関係性の形成条件（二重化条件、三重化条件

など）ごとに、ファンタジーの没入頻度、ファンタジーの内容分析、さらには他者認知の水準などについて吟味し、条件によるファンタジーへの没入現象の防止効果を検証する。

(2) ファンタジーの特徴に関する聞き取り調査

小中学校に在籍する高機能広汎性発達障害児の担任教師26名を対象に下記の聞き取り調査を行った。

①こだわり行動や対人関係などの行動特徴の調査

②ファンタジーへの没入に至る契機や前後の状況

③ファンタジーの内容や展開

④ファンタジーの没入状態から現実場面への離脱の契機

4. 研究成果

(1) 高機能広汎性発達障害におけるファンタジーの発生起源

高機能広汎性発達障害児の社会性の発達を阻む要因となっているファンタジーへの没入現象について、その発生起源を検討した(湧川・神園、2006)。対象児が示すファンタジーの内容は、その多くがこだわり行動と関連していた。これらのこだわり行動は、対象が発達初期の感覚運動的な関わりが中心となる具体的なモノに対するこだわりから、内的・表象的な対象へのこだわりへと発達的に変化する傾向があった。自閉症児にみられるファンタジーへの没入現象の多くが、表象水準のこだわり行動が頻発する時期に出現しはじめたことから、自閉症児におけるファンタジーの起源が、彼らのこだわり行動にあることが明らかになった。そして、こだわり行動が自閉的ファンタジーとして変貌する背景には、行動水準から表象水準へ動機づける主体の側の発達変化が重要な駆動因として作用していることが想定された。

Scott and Baron-Cohen (1996) は、自閉症児が空想のありえない絵を描けないという事実は、描画のアイデアを生みだしたり、心に思い描いたりする過程、すなわち、想像力の障害に起因すると主張している。これに対して Leavers and Harris (1998) は、非現実的な空想の存在を描けないのは、対象をイメージできないのではなく描画のプランニングに制限があることによるとの見解を示した。空想の絵を描けないのは、心の中以外には存在しない空想的な存在を表象する能力、すなわちメタ表象能力や象徴機能などの認知的能力の欠如に依存するのか、あるいは広汎性発達障害に特有なステレオタイプな行動や反復行動(こだわり行動)に反映されるプランニングの問題のとの関連が深いのか

かについては、その後、心の理論欠如仮説と実行機能障害説にわかれて論争が続いている。こうした議論に照らして、本研究の結果を解釈すると、ファンタジーの起源がこだわり行動にあるとの知見は、Leevers and Harris (1998)の見解を支持しているとみなすことができる。恐らく、ステレオタイプな行動やこだわり行動を状況や場に囚われることなく実現するために、換言すれば、自我の自由度を保障するために、自由に内的活動を展開できる自閉的ファンタジー世界への傾倒が生じるのであろう。

(2) ファンタジーの物語展開と情動および言語的コミュニケーション能力の関連

広汎性発達障害児におけるファンタジーの内容分析から、ストーリーの展開が乏しく、過去の経験を反復するファンタジーは、快・不快の情動反応を随伴することが多く、情動の関与が強くなるにつれてファンタジーの展開が一層乏しくなる傾向が確認された。他方、豊かな展開を示すファンタジーは、アニメのキャラクターなど自己以外の対象化・客体化されやすいモノが主体をなしてストーリー展開が図られていることから、自己の情動が直接的に関与しにくく、その結果自由なストーリー展開が可能になったのであろう。こうした結果から、ファンタジーの展開に主体の側の情動が関与していることが明らかになった(宮里・神園、2008)。次に、言語によるコミュニケーション能力が高い対象児はファンタジーにおけるダイナミックなストーリー展開がなされ、他方、言語的コミュニケーションを苦手とする対象児は、自己の経験をなぞることで随伴する情動を追体験する傾向があり、結果的にストーリー展開が乏しくなるという特徴があった(宮里、神園、2008)。

(3) 相貌的知覚がファンタジーに及ぼす影響について

広汎性発達障害児におけるファンタジーの内容は通常概念的な理解や意味的理解の範囲を超える場合が多く、理解が難しいときが多い。しかしながら、彼らのファンタジーを、外界の世界を人と共通した表情・運動(相貌的特質)を持つ対象として捉える相貌的知覚や生き生き感(vitality affect)といった原初的知覚態様の枠組みに照らすと、その指示する内容を把握できる場合がある。山口・神園(2007, 2008a, 2008b)は、自閉症児の知覚態様の臨床モデルを提起して、相貌的知覚といった原初的知覚態様を基盤として自閉的ファンタジーが生成される道筋を想定した。その上で、小学校の学校生活場面で自閉症児が示す様々な特異行動や学習形態を、相貌的知覚や生き生き感といった原初的知覚

態様の枠組みを適用すると、どのように記述できるかを検討した。自閉症児の知覚入力処理過程には生き生き感や相貌性が大きく作用し、知覚対象にそうした生き生き感や相貌性が張りついた状態で経験が保存される。したがって、自閉症児の対象認識においては、現象的知覚が色濃く作用した特有な表象が形成され、これらの表象世界が自閉症児の行動や学習の性質を特徴づけていることが明らかになった。

(4) 描画とファンタジーの関連

自閉症児が描く描画はステレオタイプで創造性が乏しいと言われている。この原因については、実行機能障害説と心の理論欠如説の2つの見解が主張されており、両説による論争がなされてきた。Scott and Baron-Cohen (1996)は Karmiloff-Smith (1990)の'Draw an Impossible Person'課題を通して、自閉症における想像力の欠如を指摘した。こうした傾向は高機能自閉症児とアスペルガー障害児を対象とした Craig, Baron-Cohen, Scott (2001)によっても検証されている。一方、Leevers and Harris (1998)は絵画完成課題の実験から、自閉症児の困難性は想像性もしくは他者の精神状態の理解にあるというよりも、むしろ全体的に新奇な描画をするための視空間的なプランを実行するところにあると提案した。

大城・神園(2008)は、ある高機能自閉症児が3歳10カ月から5歳3か月までに描いた絵を分析して、自閉症児の描画発達の時期区分を提案した。対象児は従兄弟たちや保育所の他児などの多様な人物画に加え、アンパンマンやキティなどのキャラクターの絵などの多くの絵を描いていた。不可能な絵を描かせる教示をしているわけではないので当然であるが、実在しない不可能な人物は描かれていなかった。しかしながら、アンパンマンについては頭から左右に2個の頭が伸び、手や足のいたるところにアンパンマンの顔が描かれた奇妙な絵が描かれていた。この事例は、前述した想像力の欠如か実行機能の障害かといった議論に照らして考えると後者の可能性を示唆する証拠としてみなすことができる。すなわち、実在しないキャラクターの描画では、想像されたイメージを描画プランに移行させやすくなり、想像通りの描画表現が実現したと考えることができる。

(5) ファンタジーの没入・離脱と支援方法

ファンタジーへの没入は、対人関係等における不安や不快を回避するための防衛機制として出現することが従来から指摘されている。本研究でも授業中に取り組める課題がなく、何をしてもよいかわからないときなど、

彼らが不安や不快な状態におかれた時にファンタジーへの没入が確認された。こうした防衛機制的な働きを持つファンタジーに加えて、喜びや楽しさなどの快の情動が昂じた際にもファンタジーへの没入が認められた。他方、ファンタジーからの離脱の状況については、学校場面ということもあって、担当教師による注意喚起による離脱が多く報告された。その他に、ストーリーの終りを区切りとして離脱する事例などが認められた（宮里・神園、2008）。

防衛機制的なファンタジーは離脱への抵抗が高いため、不安や不快要因を軽減することでファンタジーへの没入を防ぐ支援方法が効果的であり、他方、快の情動が昂じたために生じたファンタジーでは、没入時点の特定が難しい反面、授業開始のチャイムや教師の声かけで容易に離脱が実現することから、離脱時点に重点を置く支援方法が効果的であることが示唆された。

(6) 広汎性発達障害児におけるファンタジーの特性

宮里・神園（2008）は、広汎性発達障害児におけるファンタジーへの没入現象の特性を明らかにした。第一に、ファンタジーの内容については、表象化されたこだわり行動をそのままぞるファンタジーから、こだわり対象から概念的枠組みを抽出し、それをスクリプトとして時々構成要素を入れ替えて再構成されたファンタジーなど多彩な形態が認められた。また、こうしたファンタジーは、対象児の実体験を基に構成されており、定型発達児に見られるような想像上の存在の登場や架空の展開といった虚構性は極めて薄く、むしろ自己の経験の域を出ない内容である点にその特性がある。第二に、ファンタジーの出現状況と表出形態については、消しゴムや指人形などのモノに向かって話しかけるような形でファンタジーの内容が表出されたり、描画に随伴してファンタジーが展開されたりする事例、さらには言語的表出が不明瞭であるが内容を表す動作の出現が顕著な事例などが確認されたが、多くは発語内容の把握が困難な独語様の表出形態であった。第三に、ファンタジーの発達変化については、児童期の前期・中期では自己が登場せず、自己とファンタジーが一体化しているため、時には現実と虚構の区別が曖昧な事態に陥る場合が生じる。しかし、児童期後期から中学にかけて、次第にファンタジーと自己の間に距離が生じ、ファンタジーが自己の外側に分離することでファンタジーを対象化できるようになる事例が出現する。第4に、タイムスリップ現象との違いである。ファンタジーは次に示す点でタイムスリップ現

象と異なる。一つは、ファンタジーは遊びとの類似性が高く、快の情動を伴うのに対して、タイムスリップ現象の多くが、過去の外傷体験に根差している関係から負の情動を随伴している。二つは、タイムスリップ現象では想起される内容が時間の経過に左右されないが、ファンタジーの内容は時とともに変化する。三つは、ファンタジーへの没入と離脱は状況等によってある程度自己制御が可能であるが、タイムスリップ現象は感情的な体験が引き金となって、いわば自動的に生起される。

以上の結果から、ファンタジーへの没入現象はタイムスリップ現象とは質的に異なるものと考えらるべきである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計3件）

- ①山口勇馬・神園幸郎、小学校における自閉症児への教育的支援について—原初的知覚を枠組みとした行動の理解—、琉球大学教育学部発達支援教育実践センター紀要、査読無、第1号2009、19-28
- ②大城理恵・神園幸郎、高機能自閉症児における社会性の発達と描画の変化、琉球大学教育学部障害児教育実践センター紀要、査読無、第9号、2007、81-92
- ③松島はるか・神園幸郎、ある高機能自閉症児の「指さし行動」の特徴、琉球大学教育学部障害児教育実践センター紀要、査読無、第8号、2006、57-67

〔学会発表〕（計5件）

- ①山口勇馬・神園幸郎、小学校における自閉症児への教育的支援について—原初的知覚を枠組みとした行動の理解—、日本特殊教育学会第47回大会、2009年9月19日、宇都宮大学
- ②宮里秀太郎・神園幸郎、広汎性発達障害者における自閉的ファンタジー—自閉的ファンタジーの特徴を中心として—、日本特殊教育学会第46回大会、2008年9月20日、米子市文化ホール（島根・鳥取大学共催）
- ③山口勇馬・神園幸郎、小学校における自閉症児への教育的支援の在り方（1）—原初的知覚を枠組みとした行動の理解—、日本自閉症スペクトラム学会第7回研究大会、2008年9月13日、東北大学川内北キャンパス
- ④山口勇馬・神園幸郎、通常学級における自閉性障害児への教育的支援の在り方—自閉性障害児の支援を通して—、日本発達障害学会第42回研究大会、2007年8月4日、山口県立大学
- ⑤湧川華奈子・神園幸郎、高機能自閉症児の社会性障害とファンタジー世界、日本特殊教育学会第44回大会、2006年9月17日、

群馬大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

神園 幸郎 (KAMIZONO SACHIRO)

琉球大学・教育学部・教授

研究者番号 : 70149334